

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 胡適の思想と教育実践 : デューイ思想の影響  |
| Author(s)  | 任, 雅楠   |
| Citation   | HABITUS , 25 : 93 - 111   |
| Issue Date | 2021-03-20  |
| DOI        |   |
| Self DOI   | <a href="https://doi.org/10.15027/50606">10.15027/50606</a>                                       |
| URL        | <a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050606">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050606</a> |
| Right      |   |
| Relation   |   |



# 胡適の思想と教育実践 ——デューイ思想の影響

任 雅 楠

(広島大学大学院博士課程後期)

## はじめに

現在、日中両国は教育に関するさまざまな問題を抱えている。受験競争の過熱、いじめ、学力低下、学級崩壊、暴力行為、薬物乱用、犯罪被害、少年非行、自殺、家出など教育荒廃の現象が社会的に大きな関心を集めている。このような状況下で多く見られるのは、本来あるべき健やかな子どもの姿が失われるという事態である。

これらの問題を解決するには、子ども本来の在り方に焦点を当て、現在の体制のみならず、教育原理・方法の研究がこれまでもたらした数々の知見を結集して解決の糸口を探る必要がある。その際、二つの時期に焦点を当てたい。ひとつは、子どもの個性や主体性や経験に大きく舵を切り、児童中心主義のもとで展開された中華民国期の教育と日本大正期新教育運動である。いまひとつは、現在の日本の「生きる力」を育む教育と中国の「素質教育」改革である。我々は、両国のこれらの時代において児童中心主義教育の点で双方から高い評価を得たアメリカの哲学者ジョン・デューイ(John Dewey : 1859-1952 ; 以下デューイと称する)の教育思想とその受容に注目したい<sup>1)</sup>。というのは、この二つの時期に両国でともにデューイの教育思想が学問的にも教育行政的にも注目され、高い評価を得るからである。

本論文では、これらの中の一つの時期である(中国の場合)中華民国期において、デューイの思想を受容し、紹介し、革新していたデューイの弟子である胡

適の思想と教育実践に焦点を当てて考察したい。胡適は中国近代の文学者、思想家、哲学者であり、新文化運動のリーダーとして知られている。胡適は 1915 年から 1917 年まで、コロンビア大学でデューイの下で勉学していた。デューイ的な物の見方の受容と言え、時的には胡適の留学時代あるいはそれ以降だと思われがちである。しかし、幼少・青年期(渡米前)の胡適の経歴を見れば、必ずしもそうではないことがわかる。

日中両国における胡適の教育思想と実践に関する先行研究としては、緒形(2004)、関(2008)、王(2008)、西尾(2012)、山下(2019)、劉(2020)などが挙げられる。ところが、これらには、胡適の生涯を振り返って、全面的に、デューイ思想とのつながりを解明する研究は少ない。本論文では、胡適の生涯と業績を紹介した上で、彼の時代的な思想特徴を解明したい。それを踏まえて、東西文化が融合した時代の流れの中で、伝統的な知識人である胡適がいかにかデューイ思想と出会いを経て、受容・革新したのかについて明らかにしたい。具体的には、それぞれの段階(幼少・青年期、留学期、留学以降)の思想や教育実践とデューイ思想との繋がりについて以下詳細に考察してみたい。

## (1) 胡適の略歴

胡適は中国近代の文学者、思想家、哲学者であり、新文化運動のリーダーとして知られている。彼は中国近代の文学、哲学、教育学、紅学(紅樓夢を研究する学問)などの多岐な分野に影響を及ぼした。この人物については、蒋介石からの評価が最もよく知られている。その評価とは、「新文化旧道德の楷模、旧倫理新思想の師表」<sup>2)</sup>(楷模・師表ともに手本となる人の意味)というものである。以下、その胡適について、彼の略歴を挙げてみよう。

胡適は 1891 年に上海で生まれた。本名は胡嗣糜だが、少年時代、「物競天択、適物生存」という進化論思想の薫陶を受け、「胡適」と改名した。北京大学教授、駐米大使、北京大学総長、中央研究院院長を歴任し、1962 年台湾で逝去した。

5 歳から 14 歳まで叔父の家塾に通いながら、中国の伝統教育を受け、『孝経』・『論語』・『孟子』・『大学』などを学んでいた。それに加えて、この九年間の伝統教育で父の胡伝の遺風により、理学の薫陶を強く受けていた<sup>3)</sup>。また、『小学』『資治通鑑』などの古典を読んで、「神滅論」のことを知り、その影響の下で、無神論者となった<sup>4)</sup>。14 歳の時、故郷を離れて上海に出て梅溪学堂に入学し、西洋近代流の新式教育を初めて京師同文館で受けた(新式教育とは西洋教育制度を参考にして創り出した教育制度を指し、そうした近代の最初の新式学堂が洋務運動期の京師同文館である)。その後、相次いで、澄衷学堂・中国公学・中国新公学で教育を受けた。すなわち、胡適は上海で相次いで四つの新式学校で学んだのである。この時期、青年胡適は、近代思想を広く紹介する雑誌『新民叢報』や『民報』を入手でき、とりわけ梁啓超の『新民説』から強い影響を受けて、民主主義の思想に深く感心するようになった。

このような民主主義思潮の下で、胡適はアメリカへ留学することを決心した。胡適はアメリカ派遣の官費留学生選抜試験に合格した後、20 歳で渡米した<sup>5)</sup>。最初、胡適は、1910 年にコーネル大学へ入学し、次兄からの勧めを受け入れ、農学を専攻した<sup>6)</sup>。この間、農科の他に、欧米文学の翻訳や中国古典について独学で文学上の研鑽を積んだ<sup>7)</sup>。このような幅広い分野での勉学の後、自分の興味や適性についてより一層深く認識することで、文学の道に進むべく 1912 年同大学文学院に転科した<sup>8)</sup>。1914 年文学院を卒業したのち、さらに同大学の研究院(哲人研究所)に進んだ。しかし、進級したコーネル大学の哲学系は「新唯心主義」に傾斜していたゆえ胡適には不向きだった。胡適は自らにふさわしい哲学を求め、デューイ思想に出会い、強く惹かれていく。そして、1915 年、胡適は、デューイが教鞭を執るコロンビア大学哲学研究院に進んだ<sup>9)</sup>。この間、『新青年』で「文学改良芻議」(1917 年)を発表し、中国での文学革命の口火を切った。

1917 年、胡適は七年間の留学生生活を終えて帰国し、北京大学の教授として勤

め始めた。この間、「中国哲学史大綱」「西洋哲学史大綱」「欧州文学名著」などの教科を担当した。この時期の胡適は、「二十年間政治を語らない」という理念を貫き、文化・思想・教育の活動に身を投じた。これらの活動の中では、『新青年』を中心とする思想啓蒙運動(新文化運動)が最もよく知られているであろう。胡適が新文化運動や白話文運動の中核人物として、『新青年』で「易ト生主義(イプセン主義)」(1918年6月号)・「実験主義」(1919年4月号)などを発表した。これを機に、胡適が独立健全と考える梁啓超の「新民説」に由来する個人主義を提唱するようになる<sup>10)</sup>。その後、1919年7月に陳独秀らが創刊した『毎週評論』で胡適は二年前の「二十年間政治を語らない」という決意に背き、政治問題を論じた「多研究些問題、少談些主義」(もっと問題研究をして、主義を語るのは控えよう)を発表し、「問題と主義の論争」(新文化運動の中で、中国の将来の発展方向について、自由主義者とマルクス主義者の間での論争)が起きた。

またこの年の5月には、胡適の仲介でデューイの訪中が実現した。日暮(2014)によると、「胡適が、デューイの弟子として、また、優れた翻訳者として、各地で行われたデューイの講演の多くに随行し」<sup>11)</sup>その後、1922年11月に公布されたデューイ教育思想の影響を受けた壬戌学制の制定に至る審議過程において胡適は大きな役割を果たしていく。この後の1924年、胡適は中国禅宗史の研究に注目し、禅宗史に関する論考を著し始める。だが、胡適の禅宗史研究は当時入手できた資料の制約のため、唐代の原史料を入手できず、思い描いた研究をほとんど進めることができなかった<sup>12)</sup>。

1926年、胡適は北京大学の教授の職を辞めて、中英庚款委員会の会議を機に、シベリア鉄道経由で渡英し、欧州での遊歴を始めた<sup>13)</sup>。欧州遊歴の目的のひとつは、かつて果たせなかった禅宗史研究の遂行にあり、このとき胡適はロンドンの大英博物館及びパリの国立図書館所蔵の敦煌文書の中から禅宗史の重要な資料を発見している。胡適は敦煌文書を用いて、あきらめていた禅宗史研究を継続させることになった。欧州遊歴の後、米国に渡り、帰国の途中で、「上海ク

一デター(国民党新右派が武力行使に対して抗議のためのデモを行った労働者・市民に対し発砲・虐殺し、国民党左派・共産党系労働組合の解散を命じ総工会の建物を占拠した事件)」のを知り、暫く日本に滞在した。当時、禅宗史研究に関心を寄せていた胡適は情勢が落ち着くのを待つ間に、高楠順次郎・常盤大定らの仏教学者を訪ね、研究交流を深める<sup>14)</sup>。

1927年5月、胡適は上海に帰着してからは母国の教育事業の発展に没頭した。1927年8月から1928年6月までは、光華大学で教授として勤めた。そして、呉淞中国公学校長に就任した。1930年、胡適は中国公学の校長を辞めて、家族とともに北上した<sup>15)</sup>。1931年、北京大学の総長である蔣夢麟の招請により、同年2月、北京大学文学院院长兼中国文学系主任に就任した。

1937年、全面抗日戦争が始まった。その状況の下で、蒋介石の意を受け、中国に対する理解と支援を得るために、1938年9月、胡適は駐米全権大使に赴任した。以前、「二十年間政治を語らない」と決意した胡適が本格的に自らの政治キャリアを始めたのである。在職中、米国各地を訪ね、数多くの講演を行って行く。1942年駐米大使を解任された後、胡適は学術研究と教育の道に戻り、1943年1月から米国国会図書館東方顧問として勤め始めた<sup>16)</sup>。1943年の秋ごろは、『水経注』研究を始めた。そして1946年9月、胡適は北京大学校長に就任した。当時、激しい反内戦の運動の中で、胡適は、「政治的な要求のため学業を放棄してはならない、自ら有用な人となるように努力するべきである」と、政治より学問を優先すべきことを学生たちに説いた<sup>17)</sup>。1948年12月15日、胡適は飛行機に搭乗して南下した。1949年3月、蒋介石の意を受けて、救援活動のために渡米した<sup>18)</sup>。その翌年、プリンストン大学の招聘を受けた。その後、学術教育振興のために台湾へ帰り、1958年4月、中央研究院院長に就任した。1959年2月、胡適は国家長期発展科学委員会を組織して、台湾発展のための基礎を築いた。しかし、1962年2月24日、突然の心臓病の発作によって72歳で逝去した。

以上見てきた胡適の生涯を振り返ると、彼の思想と教育実践を解明するためには、下記の三つの時代的な思想特徴をふまえることが重要となることが分かる。すなわち、(1)初期思想形成—宋明理学やデューイ的な物の見方との繋がり [1895年-1910年]、(2)デューイ思想の受容と創新 [1910年-1926年]、(3)整理国故(科学的な学問方法論を用いて、中国伝統の歴史・思想・文学などを研究整理)と禅学史研究である[1923年以降-晩年]。

ただし、本研究では、胡適とデューイ思想との繋がりを課題とするため、胡適思想の全体をふまえた上で、デューイの思想との親和性が見られ、デューイ思想の受容へと向かう胡適の思想形成過程を再度振り返り詳述してみよう。具体的には、(1)初期思想形成—宋明理学やデューイ的な物の見方との繋がり [1895年-1910年]、(2)デューイ思想の受容と創新 [1910年-1926年] に焦点を当てて考察してみたい。

## (2) 初期思想形成 — 宋明理学やデューイ的な物の見方との繋がり

胡適はデューイ思想との出会いについて、「1915年の夏休みに、デューイ先生の著作を読みあさり……以後、実験主義は私の生活と思想の一つの導きとなり、私自身の哲学の基礎となった」<sup>19)</sup>と述べている。これを見ると、胡適の生涯においてデューイ思想が大きな影響を与えたことが分かる。デューイの思想の受容と言えば、時期的には胡適の留学時代あるいはそれ以降だと思われがちである。しかし、渡米前の胡適の経歴を見れば、必ずしもそうではないことが分かる。なぜなら、幼少期の胡適が受けた伝統教育や家庭環境の影響には実験主義の精神と共通するところが多いうえに、その後上海で新式教育を受けた時に発表した一連の文章や活動に民主主義の思潮や改良主義の思想を見出せるからである<sup>20)</sup>。上記のことに鑑みれば、胡適が実験主義を受容した原点は渡米前にあり、実験主義の受容の必然性があると考えられる<sup>21)</sup>。この幼少・青年期の思想はデューイ思想受容の基礎となるとともに、アメリカ留学期以降の思想変

遷にも繋がっている。それゆえ、幼少・青年期の思想を解明する必要が生じる。具体的には、以下のように述べていく。

まずは、幼少期の伝統教育の時期(1896年-1905年)に焦点を当ててみよう。胡適の出身地である安徽省徽州府は古代以来、教育重視の伝統があり、歴史上、多くの儒学者を輩出するなど、儒学の雰囲気非常に濃厚な土地であった。胡適は、幼い頃、父の遺風により、宋明理学の思想を受け入れた。宋明理学は、よく「新儒学」と呼ばれ、衰えかけた儒学が宋明の学者により再構築された学問のことである<sup>22)</sup>。徽州出身者の朱熹・程頤・程顥と明代の王陽明が宋明理学の代表者として知られている。

それに加え、清代の考証学も胡適に大きな影響を与えた。この考証学は、宋明理学の「無証不信」という懐疑精神に立ち、実証主義的見方が支持された。胡適は実験主義に出会った時に、考証学の「無証不信」という懐疑精神が実験主義の理念に一致することを発見したという<sup>23)</sup>。ここで述べられた「無証不信」という理念は、根拠をもって疑問を解決するという学問の方法と態度を意味した。そこでは、「真理と思われてきたものは実践によってその効果が証明されるまで真理とは言えない」という実証主義の精神と大いに一致する<sup>24)</sup>。

さらに胡適は、宋明理学における教育思想の薫陶を受けて、教育における思考の重要性を意識するようになった。すなわち胡適は、学問を進める際にひたすら情報としての知識を記憶するだけでなく、疑問を抱き思考することの重要性を指摘し、思考を学問の基礎に位置づけた。胡適は、この時期、そうした反省的思考こそが真に学問を発展させることができるという理念と確信を持ったのである<sup>25)</sup>。

宋明理学者は常に時代の先覚者として先端的な社会思想を追求し、社会への責任意識を養うことを重要視していた。このような宋明理学の影響の下で、社会改革を志す多くの志士が輩出されていた。その中に、胡適の父も含まれている。胡適も幼少期において、父が残した教材や日記を通じて当時の社会思想に



触れることで、社会的な責任意識を養成することができていた。後のアメリカ留学中に、デューイらアメリカの教授が政治活動に参加する姿を見て、胡適は感銘を受けている<sup>26)</sup>。

以上のことを総じてみれば、胡適は父親の遺風により、宋明理学の懐疑精神、知識人の社会的な責任意識を踏襲し、教育における思考理念も継承したといえる。一方で胡適は、当時の中国古来の迷信思想に懐疑を示すことになる。

胡適は少年時代に『資治通鑑』を通して范縝の「神滅論」に接し、神の存在をためすため神像を破壊する行為をしている。その結果、神から何の罰を受けずに済んだ経験により、「神滅論」の正しさを立証したという。このような、大胆な実験を通して自分の疑問を解決する気質が後に胡適を実験主義の方法へと向かわせたと想像することができる<sup>27)</sup>。ちなみに胡適は、生涯にわたって無神論者であるが、これも宋明理学の思考の精神と懐疑精神を身につけたことに関連すると思われる。

胡適は九年にわたる故郷での教育を終えた後、14歳で上海に出て、新式教育を受け始めた。この時期に胡適は近代啓蒙思想を大きく受け入れていくことになる。その代表として、嚴復の『天演論』(T.H.ハクスリーによる『進化と倫理』1893年の訳書)と梁啓超の『新民説』が挙げられる。胡適は嚴復の『天演論』を読んで進化論の思想に接し、「適者生存」という思想に惹かれ、「胡適」と改名までしている。それとともに、梁啓超の『新民説』に共鳴し、民族教育文化事業を発展させるために、思想啓蒙運動に尽力した。この時期の胡適は、先達たちの多様な思想を吸収・発展させ、自分なりの知見を大いに開花させていった。『競業旬報』で発表された胡適の論文にそうした幅広い知見が示されている。そこでの胡適の見解をいくつか紹介してみたい。

まず胡適は、伝統的な女子教育観念を吟味した上で、自己の主張を打ち出している。

「敬告中国的女子」(中国の女子に告げる)(1906年11月)の中で、胡適は伝統

的な女性観に対して批判を示した。具体的には、以下の方面について論及した。胡適は「女子無才便是徳」(教育を受けない女性こそ良い女性だ)という伝統観念を大いに批判し、纏足(幼児期より足に布を巻かせ、足が大きくなるようにするという南宋以来の伝統的な旧習)をやめるべきだと提唱する。旧弊ともいえるこれらの点を踏まえて、胡適は女子教育を大いに提唱する。女性が教育を受ければ、有用な人間になる。そうするとその女性の教育によって子どもも立派な人材に育つことができる。そして、胡適は、最終的にそうした教育の成果が社会への貢献にも繋がり、彼が真の民主主義を担う人民とする「新民」になることができるという<sup>28)</sup>。こうした論調に立ち胡適は、「論家庭教育」(家庭教育を論じる)(1908年9月)の中で、女子学校設立の提案を打ち出した。家庭教育のレベルが直接に国力に関係していると考えられるため、当時、国力の弱かった中国をより発展させるために、胡適は、女子教育や家庭教育の健全化を喫緊の改革課題として提唱したといえる。そして、その中核に母親の在り方が置かれ、母親を家庭教育の鍵に位置づけ、子どもの教育を立派に担える母親を養成する必要があるという見解を示した<sup>29)</sup>。

さらに、胡適は家庭関係における伝統観念についても自分の見解を示している。特に、「孝」の徳に注目し、伝統的な「孝行」観念である「息子継承、供養の理念」が実現すれば、「仁人義士の名誉が永久に伝わり、長く消滅しない、全社会は彼らを記念する」<sup>30)</sup>と述べ、子どもが孝の徳を身につければ社会に有用な人材となり、死後も多くの人々に供養され称えられると胡適は考えた<sup>31)</sup>。ここからは、中国流の『新民説』ともいえる「孝」に基づく理想社会の実現構想が読み取れる。

とはいえ、多くの旧弊となる伝統観念に対して胡適は問題を見、国民的な反省や国家的な改革が必要であると考え、実際に、理学思考精神に基づく思想啓蒙や社会改良を図っていった。このように急進的な民主人士(民主派)の梁啓超と異なり、胡適が武力革命活動に興味を示さず、思想啓蒙、教育文化事業の発

展を通して、社会改良の達成を望んだということは平和的改革の事例として注目に値する。

### (3) デューイ思想の受容と創新

母国で民主主義の薫陶を受け、教育・文化を通じた救国の理想を抱いていた胡適は、民主主義の本場であるアメリカへの留学を志した。まずは、アメリカ留学期において、胡適が自分の哲学の基礎に位置づけるデューイ(思想)とどのように出会い、いかにその思想を受容していったのかについて見てみよう。

まずは、二人が出会ったそれぞれの背景を解明してみよう。胡適がデューイと出会ったのはコロンビア大学期(1915年-1917年)である。先に見たように、胡適はデューイに出会う前からすでに欧米で広がりを見せていた進化論に触れていた。一方でデューイの場合はシカゴ大学期(1894年-1904年)において、進化論と実験主義を結びつけた実験主義教育学を開花させ、多くの教育学上の成果を蓄積させていた。胡適は、そのデューイがコロンビア大学に移った時期にデューイとの出会いを果たす。彼は、コロンビア大学在学中に、デューイの「論理学之宗派」「社会政治哲学」などを履修し、デューイ思想そのものに触れ啓発される。そして、胡適は自らの留学生活の集大成として、デューイの「論理思想の諸段階」を踏まえて「古代中国における論理的な方法の発展(The Development of the Logical Method in Ancient China)」と題する博士論文を完成するのである。

では、つぎにデューイ思想研究を終え母国に帰国した胡適の活躍について言及してみたい。胡適はアメリカ留学期(1910年-1917年)を終えて帰国し、北京大学の教授として勤め始めた。まずこの時期における胡適の哲学的な見解について確認してみよう。

胡適は中国においては陶行知と共通して、当時、デューイ思想の方法論を重視する立場を採ったことで知られる。胡適の思想において、幾つかの方面から、

デューイ思想の方法論的側面を見出すことができる。まず政治思想の方面に関して説明してみたい。胡適は帰国後、マルクス主義との対峙が鮮明になる状況に置かれ、「問題と主義の争い」の中で、現実の問題の対処を優先し主義に固執すべきでないとは主張する立場(「多研究些問題、少談些主義」)を擁護したため、一般に、社会改良主義者・自由主義者として知られた。加えて、彼は、デューイの哲学方法論を中国の伝統的な研究法に基づき強調したことで大きく注目されるようになった。

山下(2019)の言に沿って、この当時までの胡適思想の特徴的な経緯を総じてみよう。胡適は、前述した清朝考証学における科学精神を背景にデューイのプラグマティズム思想へと接近する一方で、ダーウィンの進化論から着想を得たデューイの発生的方法を参照し、中国哲学史を目的論的に解釈するという、中国の伝統思想とデューイ思想の間での往還をなした<sup>32)</sup>。こうした経緯の元、胡適は、中国で初めて開設された北京大学の「中国哲学史」の授業でデューイのプラグマティズム論理学を導入した<sup>33)</sup>。そして、この授業の成果が『中国哲学史大綱』(1919年2月)として著され、この書はすぐれた哲学史に関する著作として中国学界で大きく注目された。

では、この胡適の代表作である『中国哲学史大綱』はどのような点でデューイ思想とかかわっているのだろうか。以下では、その繋がりについて見てみよう。

胡適は、「中国哲学方法之進化史」を踏まえて『中国哲学史大綱』を著した。この創作過程の中で、デューイ的なプラグマティズムの受容を見出すことができる。そこでのデューイ的解釈によれば、欧州哲学史において、論理思想の展開は、①固定的な観念、②討論、③「証明」を中心とする帰納・経験科学、④「推論」を中心とする帰納・経験科学という四つの段階を辿るとされる<sup>34)</sup>。胡適は、この欧州哲学史が四段階を経るという考え方を『中国哲学史大綱』に導入した。つまり、古代中国(先秦時期)哲学史の場面において、「論理思想」の歴

史的変遷に焦点を当て、哲学方法の発展経過を解明したのである。具体的には、「詩人の時代」・「詭弁学者の時代」・「孔子による証明論理の時代」・「高度論理思想を備えた墨子のプラグマティズムの時代」<sup>35)</sup>という四段階説を中国哲学史に採用したのである。こうした胡適の解説は、中国哲学史の構築において、科学的・実証的な思考を受け入れた象徴的で画期的な出来事でもあった。これをもって胡適は、中国伝統哲学を現代化の歩みに導くリーダーとして認められるようになった。

しかしながら、この胡適の『中国哲学史大綱』に対して問題も多く出されたことは指摘しておかねばならない。たとえば、『中国哲学史大綱』の内容について、こうした「四段階の分け方」そのものの是非、「老先孔後の捉え方(老子の自然宗教が孔子の人文主義に先行するという見方、すなわち、老子や老子思想の時代が孔子や孔子思想の時代と比べると、より早い)」、そして「方士宗教への認識(中国古代哲学が秦漢時代に至って衰退し消滅していく。その消滅の一つの原因として、当時の方士宗教の思想に同化されたことが挙げられる。)などに対して反論がなされ、胡適が最も強調する「論理思想」自体も(先秦哲学の消滅の原因を「論理思想」そのもの自体に求めないという視点から)問題視された。

そのような批判を受けて苦悩に陥った胡適は、さらにデューイの『哲学の改造』からこれらの問題に対する解決の糸口を発見した。つまり、デューイによれば、伝統的な認識を転覆し、「ミュトス(神話)」が哲学の初期段階で大きな役割を果たしたと理解された。その上で、ミュトス的な思考は、「ロゴス(理性・言葉)」と一緒に組織化・一般化の過程を経て、衝突や調和によって哲学を創り出した。(ここでは、哲学は「ロゴス」が自己展開したものではないことが強調される)これを踏まえて、デューイは経験の世界と経験を越えた世界による二元的世界観を説いた)のである。胡適はデューイの上記の観点に基づき、方士宗教(ミュトスに近いもの)を古代中国哲学の新たな発展段階として認めながら、依然として「老先孔後」(老子の自然宗教が孔子の人文主義に先行する「ミュトス」

の思想である。)という見方を維持していた<sup>36)</sup>。

胡適の『中国哲学史大綱』が発表されたのち、1919年5月にデューイの訪中が実現した。そのデューイ訪中の直前に(1919年春)、胡適は実験主義を紹介するための講演を行った。そこで胡適は「デューイ教育哲学」・「デューイ哲学の根本観念」などを紹介した。これらの講演から、帰国後の胡適がいかにかデューイ思想を捉えているかを見出すことができる。ここでは、二つのことに注目したい。一つは、胡適が、「実験主義の哲学者となって初めて進化観念を哲学へ応用できるようになった」<sup>37)</sup>と説くように、彼が、デューイ的プラグマティズムに立つことで進化論を哲学に真に應用できるものと理解していたことである。いま一つは、教育(とりわけ知識と道徳[個人的人格形成])と民主主義とを連続的に考えるデューイの見方に対して胡適が共感を示していることである。つまり、胡適は、デューイ同様、教育の場面において知識論と道徳論を関連付ける必要があるとし、そうした知的道徳的個性の育成を通して真に民主主義を担う公民の育成がはかられると考えたのである<sup>38)</sup>。

第一の観点について、ここで言及した進化論の哲学への応用という見方は、胡適による実際の教育実践の場面において多く見出される(例えば、時代的な要請に応じて、教育改革を行うことである。)それゆえ、胡適によるデューイ教育思想の受容が同時に進化論の受容をも意味している点は重要視されるべきである。

次に第二の観点について、胡適による教育の現場における実践面について見てみよう。胡適は教育に、生活に有益な科学的知識の獲得や人格の形成や民主主義社会の担い手の育成という目的の達成を期待した。単(2002)によるとそれは、①伝統的な学校教育の批判、②教育と生活、学校と社会の連携の強調、③実験主義的な方法論の推進、④児童中心教育の普及という4つのアプローチに表出されるという<sup>39)</sup>。このような方針に沿って胡適は、学制の改革や教育課程編成を担う中心人物として、デューイ流の実験主義的な教育哲学を武器にこの

事業に取り組んだ<sup>40)</sup>。最後にデューイ的な教育改革とは直接の関係は見出せないが、胡適が中国で実施したアメリカ流の制度改革についても言及しておきたい。胡適は、国語教育においてはアメリカ式の教授法や教育課程の在り方を模倣し、壬戌学制(1922)および国語科教育課程(1923)の編成の中心を担った。壬戌学制(1922)では、胡適は、教科の選択制、個性の成長、天才教育(英才教育)の重視、特殊教育の提唱などを骨子に組み込んだ。それに加えて、「建設文学革命論」(『新青年』第四卷第五号(1918))において胡適は、アメリカに倣い、学校での国語による教育は低学年から順次実施するために小中学校段階では一律の教科書を編纂すべきであるとした<sup>41)</sup>。デューイ思想との関係は明瞭ではないが、当時のアメリカが採用していた教育課程を含めた一般的な教育システムを胡適が中国で実現しようとしていたことがうかがわれる。

## おわりに

デューイは、アメリカの哲学者、教育学者であり、プラグマティズム(実用主義)<sup>42)</sup>を代表する思想家として広く知られている。彼の教育思想は、日中両国で同じ二つの時期に学問的にも教育行政的にも注目され、高い評価を得る。ひとつは、「児童中心主義」のスローガンのもと、子どもの個性や主体性や経験に注目した時期、すなわち、中国では中華民国期、日本では大正期新教育運動の時期に当たる 1910 年代後半から 20 年代である。いまひとつは、1980 年代以降展開される現在の改革、つまり、日本における「生きる力」を育む教育と、中国における「応試教育」の問題を克服するものとして提唱される「素質教育」がそれに該当する。

本論文では、これらの中の一つの対象時期である中華民国期に焦点を当て、とりわけデューイの弟子である胡適に注目し、彼によるデューイ(的な)思想の受容と中国における展開のプロセスを考察した。最後に胡適によるデューイ的な思想の受容について、本論での考察を概括してみたい。

まずは、胡適の幼少期の思想と教育実践について振り返ってみよう。胡適が実験主義を受容した原点は幼少期に胡適が受けた伝統教育や家庭環境にあり、渡米後の実験主義の受容には必然性があったと考えられる<sup>43)</sup>。加えて、胡適が渡米前に上海で新式教育を受けた時に発表した一連の文章や活動に民主主義の思潮や改良主義の思想を見出すことができる<sup>44)</sup>。こうした幼少期の思想はデューイ思想受容の基礎となるとともに、アメリカ留学期以降の思想にも繋がっている。

次に、アメリカ留学期の思想と実践について概要を再掲しよう。この時期、胡適は留学先のコロンビア大学でデューイに直接師事し、多大な影響を受けることになる。具体的には、そこで、デューイの「論理学之宗派」「社会政治哲学」などを履修し啓発され、デューイの「論理思想の諸段階」を踏まえて、博士論文「古代中国における論理的な方法の発展(The Development of the Logical Method in Ancient China)」を完成させ、学位を得ている。

最後は、胡適がアメリカ留学期を終えて帰国して以降の時期である。帰国後、胡適は、北京大学の教授として広く国内的に活躍していく。胡適による中国でのデューイ思想の展開を考えると、この時代の胡適の思想と教育実践が最も注目される。この時期、胡適の思想と実践において、「多研究些問題、少談些主義」への擁護などから、デューイ思想の方法論との共通点が多く見出せる。さらに、胡適はデューイの訪中をサポートし、訪中の直前に(1919年春)、デューイ流の実験主義を紹介するための講演を行い、中国におけるデューイ思想の普及に大きく寄与した大きな寄与をした。この講演内容から、胡適におけるデューイ思想の影響が大きく二つの点に見出せることが判明した。一つは、「実験主義の哲学者となって初めて進化観念を哲学へ応用してきた」<sup>45)</sup>という胡適の記述から、彼が哲学への進化論の応用をプラグマティズム思想の内に見ていたということ。いま一つは、胡適は、デューイ同様、教育の場面において知識論と道徳論を関連付ける必要があるとし、そうした知的道徳的個性の育成を通して



真に民主主義を担う公民の育成がはかれると考えたことである<sup>46)</sup>。

中国におけるデューイ思想の受容を解明するためには、以上見てきた胡適のほか、蔡元培、陶行知に関する考察も必要となる。中華民国期は社会変革、文化融合の時代であり、そのような時代の流れの中で、胡適、蔡元培、陶行知のような有識者が輩出されてきたのである。ただ、直接、デューイの元で学び、デューイ思想そのものを研究の対象とし、その尊敬する師を中国に招聘した胡適は、それらの人物の中でも、デューイ思想の中国受容を考える際、特別な人物として最も注目すべきであるといえる。

## 註

- 1) 日本の場合、デューイの教育思想は戦後すぐの経験主義教育の時代にも注目される。
- 2) これは、胡適が逝去した後、蒋介石の哀悼の意を表した対聯の内容であった。
- 3) 胡適著 潘光哲編『胡適全集 四十自述』中央研究院近代史研究所胡適記念館出版、2019年、pp. 36-37
- 4) 潘(2019)、pp. 39-41
- 5) 潘(2019)、p. 81
- 6) 耿雲志『胡適年譜』四川人民出版社、1989年、pp. 24-25
- 7) 耿(1989)、pp. 26-29
- 8) 耿(1989)、p. 29
- 9) 耿(1989)、pp. 43-44
- 10) 耿(1989)、p. 63、p. 72
- 11) 日暮トモ子「近代教育学が持つ文化支配への対応：中国の教育近代化におけるデューイ解釈を手掛かりに」『近代教育フォーラム』第23巻、2014年、pp. 94-95
- 12) 胡適『神会和尚遺集』胡適記念館、1968年、p. 1
- 13) 耿(1989)、pp. 149-153

- 14) 耿(1989)、pp. 154-157
- 15) 耿(1989)、pp. 187
- 16) 耿(1989)、pp. 306-312
- 17) 耿(1989)、p. 349、p. 351
- 18) 耿(1989)、pp. 377-380
- 19) 季羨林『胡適全集』安徽教育出版社、2003年、第一版、第27巻 p. 104
- 20) 劉紅「胡適の実験主義の原点——「学原于思」の幼少時代をめぐって——」『グローバルスタディーズ』(4)、2020年、p. 76
- 21) 劉(2020)、同上。
- 22) 劉(2020)、p. 77
- 23) 吳福輝『胡適自伝』江蘇文芸出版社、1995年、pp. 210-211
- 24) 劉(2020)、p. 77
- 25) 劉(2020)、同上。
- 26) 劉(2020)、p. 80
- 27) 劉(2020)、p. 79、p. 83
- 28) 周質平『胡適早年文存』遠流出版社、1995年、pp. 115-124
- 29) 周(1995)pp. 168-170
- 30) 周(1995)pp. 171-174
- 31) 劉(2020)、p. 88
- 32) 山下大喜「哲学方法論史からみた胡適思想の系譜」哲学若手研究フォーラム発表原稿、2019年、pp. 1-2
- 33) 緒形康「哲学の運命——胡適とデューイ(特集 東アジア思想における伝統と近代)」『中国社会文化学会』(19)、2004年、p. 258
- 34) John Dewey, “*Some Stages of Logical Thought,*” in *The Middle Works, Volume 1 (Southern Illinois University Press, 1976-1983)* pp. 151-174. 楊貞徳「胡適科学方法観論析」欧陽哲生選編『解析胡適』社会科学文献出版社、2000

年

- 35) 緒形(2004)、p. 258
- 36) 緒形(2004)、pp. 259-260
- 37) 季(2003)pp. 277-260
- 38) 山下大喜「コロンビア大学期における胡適とデューイの思想的交錯——デューイ思想の受容に関する一考察」『探究=The research for social studies education』(29)2018年、pp. 4-6
- 39) 単中恵『現代教育の探索：デューイと実用主義教育思想(現代教育的探索：杜威与实用主义教育思想)』人民教育出版社、2002年、pp. 494-497
- 40) 山下大喜「哲学方法論史からみた胡適思想の系譜」哲学若手研究フォーラム発表原稿、2019年、pp. 6-8
- 41) 胡適「文学改革の進行過程についての論述(論文学改革的進程序)」季羨林主編『胡適全集』安徽教育出版社、第一版、第一巻、2003年、pp. 74-75
- 42) プラグマティズム(英: pragmatism)とは、「実用主義」あるいは「実際主義」と訳されることがある。パース、ジェームズ、デューイ、ミードが代表的な人物として挙げられる。思想の特徴は以下の通りである。認識論を中核として、形而上学・道徳論・社会理論にまで及ぶ。デカルト以来の内観に基づく認識論を批判して、哲学の基礎を経験に求め、進化論の影響を受けて、経験を「進化」と「実験」によって特色づける。具体的な経験の中で科学の方法を生かすことを目指す。理性や知識が経験の素材あるいは構成要素の位置に置かれる。人間精神活動に関して、現実の生における具体的な行為の中で精神活動が果たす役割を見る視点に重心を置く。
- 43) 劉(2020)、p. 76
- 44) 劉(2020)、同上。
- 45) 季(2003)、同上。
- 46) 山下(2018)、pp. 4-6

## **The Thought and Educational Practices of Hu Shih: The Influence of Dewey**

Yanan Ren

John Dewey was an American philosopher, psychologist, and educational reformer whose ideas have been influential on education in Japan and China. Hu Shih made a notable contribution to this influence through his introduction of John Dewey to modern China (the period of the Republic of China on the mainland, 1912–1949). Hu studied philosophy at the Teachers College at Columbia University from 1915 to 1917, during which time he was greatly influenced by his professor, Dewey. Hu was a famous Chinese thinker, philosopher, essayist, and diplomat who was influential in the May Fourth Movement and one of the leaders of China's New Culture Movement. In this paper, I clarify the relationship between the thought of Hu and Dewey by referencing Hu's career and achievements. Specifically, this paper aims to clarify Hu's ideological characteristics during various periods in his life. Through this process of exploration, we see how, in the great tide of times, Hu, a traditional intellectual, accepted and renewed Dewey's ideas. Specifically, I consider, in detail, Hu's ideas at each stage of his career (before, during, and after studying abroad) and the connection between his ideas, his educational practices, and Dewey's thought.